

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

①人材養成目的に沿った科目構成の整理

《人社系》

●東北大学環境科学研究科環境科学専攻

「環境フロンティア国際プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本プログラムでは、本学の経済学研究科と協力して、理系の環境技術と人社系の手法を組み合わせた文理融合型の教育の実践によって、国際的に活躍できる環境コンサルタント等を養成することを目指したが、このプログラムのために新設した科目以外は既存の科目を流用した。流用科目については、必ずしも十分考えられた文理融合型の科目になっていなかったために、木に竹を接ぐような無理が生じた面があるように思われる。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

本研究科および経済学研究科のいずれでも担当できない科目については、外部から非常勤講師をお願いして集中講義の形でこれを開講した。しかし、選択科目を充実させるために、両研究科の既存科目を本プログラムに流用することも多くあり、この場合には、専門が大きく異なる学生に分かるような導入部を設けるよう講師に依頼したものの、その効果がどの程度得られたかについての十分な評価を行っていない。文理融合は当研究科が掲げる目標であるが、これを真に実現することは簡単なことではない。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

本プログラムは文理融合教育を試行するために最も好適なプログラムであり、これに十分な事前検討と準備が行われていれば、非常に有意義な結果が得られたであろう。勿論、いくつかの科目については良好な結果を得ており、その後の研究科の教育に活かされている。しかし、2研究科のそれぞれから提供した科目については、両研究科のすり合わせが十分とは言えず、本来の理想形には至らなかったことが残念な点として残された。